



Title	The White Peacock : 語り手Cyrilの曖昧な立場について
Author(s)	内田, 憲男
Citation	大阪外大英米研究. 1980, 12, p. 59-69
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99050">https://hdl.handle.net/11094/99050</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# *The White Peacock* — 語り手 Cyril の曖昧な立場について

内 田 憲 男

*The White Peacock* は 1906 年の秋、当時ロレンスが 20 才の時に書き始められ、その後 1910 年の春頃までに三、四度書き直されて、翌年の 1 月に出版された彼の最初の長編小説である。多くの処女作の例にもれず、この小説には彼が後の作品において発展させることになる様々な主題の萌芽がみられるが、それらが必ずしもまとまりをもって一つの筋立て (plot) に結びついているとはいえないために、読者の受け取る印象が散漫であることは否定できないだろう。第二稿が完成した段階でロレンス自身が述べた次の評言は、ある程度そのままこの作品にあてはまるといわざるを得ない。

.... all about love — and rhapsodies on Spring scattered here and there — heroines galore — no plot — nine-tenths adjectives — every colour in the spectrum descended upon — a poem or two — scraps of Latin and French — altogether a sloppy, spicy mess.<sup>1</sup>

しかし散漫な構成にもかかわらず、この小説の中心的な主題が George Saxton と Lettie Beardsall という一組の男女関係であることは明らかであり、他の部分は大体この主題と従属的な関係にあるといつてもいいだろう。<sup>2</sup> George は頑健な美しい肉体をもち、自然のリズムに合わせて生活を送る若い農夫であるが、また同時に彼は粗野で野蛮で愚鈍であり、妹の Emily に「肥った牛」(a fatted calf)<sup>3</sup> と喩えられ、Lettie にも「感覚が半分眠った」ままの「牡牛」(bos—bovis, P.28) とからかわれる。彼の親友で Lettie の兄であるこの小説の語り手 Cyril も「彼は時々豚になる」(P.18) といい、George に自分の知っているあらゆること — 「化学、植物学、心理学」の知識や「人生について、性とその起

源について」(P. 75)等々 一 を教授することによって、彼の「意識」(consciousness)を目覚めさせようとする。

やがて George は Lettie と Cyril との交際を通して次第に「意識」に目覚めようになり、それまでの仕事と眠りと安逸の生活では不十分で、「自分の城を築かねばならない」(P. 274)と考えるまでになる。そしてその城の土台となるべきものが、彼にとっては Lettie との結婚であった。しかし中産階級に属し、教養もある近代女性 Lettie は「彼女は近代女性を扱ったものは何でも読んだ」(P. 92) — 小悪魔的な女性で、George を自分に引き寄せてはまた突き離すという態度を取り、結局は彼をもてあそび、もう一人の求婚者である炭坑所有者の息子 Leslie Tempest と結婚する。この人物は、はっきりとは描かれていないが、何らかの意味で性的に欠陥のある、あるいは少なくともその意味で Lettie とは合わないと推定される男性である。<sup>4</sup> 従って、彼女が George の「肉体的な美しさ」(P. 64) に性的に強く惹かれているにもかかわらず、Leslie との結婚を選んだという事実は、彼女が自らの肉体的な自我 (her physical self) を無視して、精神的に安楽で社会的地位のある生活を選択したことを意味している。一方、彼女を奪われた George は生活の方向を見失い、官能的な欲求に引きずられるような形で、従妹の Meg という肉感的な居酒屋の娘と盲目的に結婚してしまう。

George は、結婚後、Lettie と Leslie への対抗意識から様々な商売を手がけて成功し、表面的には裕福な生活を送るが、同時にその「金持ち」の生活を「不毛の虚飾」(P. 335) と見做すようになり、社会主義者の運動に参加したりもする。しかしこれらの行動はすべて彼が自己を見失ったために取った闇雲の行動であり、彼はやがて一途に零落の道を歩む。彼は、母親としての充足感に浸りきった妻から疎外され (『『Meg は子供ばかりで、僕によろこびを見い出すことなんてなかった』』(P. 317)), また仕事も嫌になって、飲酒を逃げ場としたあぐくアルコール中毒に陥り、最後には廃人同様の惨めな姿を人前にさらすことになる。Lettie の方は、夫の社会的な活動を助ける上品な妻として、また特に献身的な母親としての役割に満足を見い出すのであるが、その生活は彼女の「女」としての肉体的な自我の犠牲の上に成り立っている。この彼女の生のあり方はアイ

ロニーに満ちた表現で次のように書かれている。

Having reached that point in a woman's career when most, perhaps all of the things in life seem worthless and insipid, she had determined to put up with it, to ignore her own self, to empty her own potentialities into the vessel of another or others, and to live her life at second hand. This peculiar abnegation of self is the resource of a woman for the escaping of the responsibilities of her own development. Like a nun, she puts over her living face a veil, as a sign that the woman no longer exists for herself: she is the servant of God, of some man, of her children, or may be of some cause. As a servant, she is no longer responsible for herself, which would make her terrified and lonely. Service is light nad easy. To be responsible for the good progress of one's life is terrifying. It is the most insufferable form of loneliness, and the heaviest of responsibilities (pp. 323-24).

ところで、このようにLettieが自らの肉体的自我を放擲することによって安易な「奉仕」の生活に逃避したのであれば、Georgeもまた官能的な生活に逃げ場を求めたのであり、上の引用文にある「自己の人生の正しい進歩に対して責任をもつこと」を自ら回避した点において、彼らの誤った生き方は等価である。事実、CyrilはGeorgeに対して「『君はあくまでも自分を主張し、自分の運命は自分で決めるべきであった』」(P. 225)と批判している。従って、Georgeの挫折は、Lettieに対して自己を主張する強い意志に欠け、そのために官能に溺れてしまうという、正に彼の弱さそのものによって招来されたといわねばならない。

しかしGeorgeの破滅はもうひとつ別の観点から眺める必要がある。それは、上に引用したコメントが示しているように、Lettieの生き方が仮借なく批判されているのに対して、Georgeの物語は愛惜をこめて語られているからである。作者ロレンス自身がそのモデルである一人称の語り手Cyrilは小説全体を通して終始Georgeに対して深い共感と愛情を寄せている。そしてその愛情は、Cyrilの

語り口の最も顕著な特徴である、彼の「自然」に対する激しい憧憬と同じ性質のものである。‘A Poem of Friendship’と題された第二部第八章は、語り手の「私」とGeorgeの関係を描くためだけに設けられた一章であるが、ここではGeorgeの肉体と自然が同一視されていることがわかる。まず、CyrilとGeorgeが二人だけで農作業をしている場面に、自然のリズムと一体となったGeorgeの姿の実に簡潔な描写がみられる。

There was nothing in this grey, lonely world but the peewits swinging and crying, and George swinging silently at his work. The movement of active life held all my attention, and when I looked up, it was to see the motion of his limbs and his head, the rise and fall of his rhythmic body, and the rise and fall of the slow waving peewits (p. 253).

Georgeの肉体の「律動的な」動きはタゲリの象徴する自然の生命の動きそのものであり、それにCyrilは魅了されている。そしてこの少し後にある「後年徐々に薄れていったほとんど情熱的な愛着を私たちが抱いていたのはこの頃のことであった」(P.253)という文章は、Cyrilの愛情が、自然の生命との調和を失わないGeorge、すなわち堕落する前のGeorgeに対するものであることを示唆している。Lettieが彼に魅了されるのも、上の引用の一節と全く同じ、自然のリズムに合わせて働く彼の姿である — 「彼女は彼を、彼の肉体的な美しさを、まるで彼が何か偉大な固い生命のつぼみででもあるかのように、まじまじと見つめた」(P.64)。しかしGeorgeは正にその肉体に「自然」が宿る生命存在であるがゆえに、同時に粗野で野蛮で愚鈍なのである。そしてそのことに対しては、知的で教養豊かなCyrilやLettieは我慢できず、彼を「教育」することによって、その半分眠ったままの「意識」を目覚めさせようとし、それが結局彼の身の破滅につながったともいえるのである。この小説の最後の場面 — 「この上なく美しく、微妙なリズムにのって」乾草積みをする二人の農夫をアル中のGeorgeがぼんやりと眺めている場面 — で、Cyrilが「無感覚の状態から彼を目覚めさせた自分を呪詛する」ところからは、深い喪失感を伴った彼の烈しい自責の念を感じ

取ることができる（P.367）。

また、同じ章の終りの方に、水浴をした後の二人が身体をこすり合う場面があるが、その中に George の「気高い、白い豊かな身体」に Cyril が魅了されるところを描いた次のような描写がある。

As I watched him, he stood in white relief against the mass of green. . . . I watched the deep muscles of his shoulders, and the bands stand out in his neck as he held it firm; I remembered the story of Annable.

He saw I had forgotten to continue my rubbing, and laughing he took hold of me and began to rub me briskly, as if I were a child, or rather, a woman he loved and did not fear. I left myself quite limply in his hands, and, to get a better grip of me, he put his arm round me and pressed me against him, and the sweetness of the touch of our naked bodies one against the other was superb. It satisfied in some measure the vague, indecipherable yearning of my soul; and it was the same with him. When he had rubbed me all warm, he let me go, and we looked at each other with eyes of still laughter, and our love was perfect for a moment, more perfect than any love I have known since, either for man or woman (p. 257).<sup>5</sup>

この場面について、ある批評家は、Cyril が Lettie に成り代わって、George が「恐れることなく愛せる女性」となり、また同じ意味で George が Cyril のために Emily に成り代わっている、と解釈している。<sup>6</sup> しかしこの見方は、George に関する限りにおいてはある程度成り立つかも知れないが、Cyril の Emily に対する態度がはなはだ曖昧なものであり、彼が彼女に情熱的な愛情を示していない以上、余りにも穿ちすぎた見解だといわねばならない。むしろこの引用部分は、George の肉体に宿る自然の生命のもつ何らかの力に接触したいという Cyril の激しい渴望を表現していると解釈する方が適切だと思われる。なぜなら、ここで Cyril が George の抱擁によってある程度の満足を得る「私の魂の漠然とした何かよくわからない憧憬」は、この場面の前にあるもうひとつのエピソード

ドにおいて彼が抱く「漠然としたあこがれ」(P.255)と同じ性質のものだからである。先に触れた農作業の後、野原を歩いて帰る途中で、Cyril は偶然ヒバリの巣を見つけ、その中で身を寄せ合っている二羽のひなに手を触れ、冷たくて濡れている野原の中にいるのにもかかわらず、そのひなが「あたたかい」ことに感動する。

The two little specks of birds lay side by side, beak to beak, their tiny bodies rising and falling in quick unison. I gently put down my fingers to touch them; they were warm; gratifying to find them warm, in the midst of so much cold and wet... In my heart of hearts, I longed for someone to nestle against, someone who would come between me and the coldness and wetness of the surroundings (p. 254).

この「誰か身をすり寄せたい相手」を、先の場面で、Cyril が George に見い出し、さらに、George の抱擁によって、自然の生命に宿る「あたたかさ」への Cyril の激しい渴望が癒されたことはいうまでもないだろう。

さらに、水浴の場面で Cyril が、George の美しい身体を眺めながら、「Annable の話」を思い出しているのは、彼にとって Annable が George と同じ意味をもつ存在だからである。Cyril は、George と同様、「〔Annable〕の堂々とした身体、彼の偉大な活力と生命力、彼の浅黒い陰うつな顔」に強く惹きつけられる。<sup>7</sup> 一方、Annable は「情愛の深い父親が織細な息子を扱うように、私を扱ってくれる」(P. 173) のである。彼はケンブリッジで教育を受け、教区牧師になった男であるが、今では「文明はすべて絵の具を塗りつけられた腐敗菌である」(P.172) という唯ひとつの観念に取りつかれていて、「『よき動物たれ、汝の動物本能に忠実あれ』」(P. 173) を自分のモットーにして森番の生活を送っている。彼は常に動物の側に立ち、密猟にやってくる人間と戦う。Cyril の目に彼の「美しい力強い姿」は「悪意を抱いた牧羊神」(some malicious Pan, P. 155) のように映る。実際、この森番は一個人間というよりは、むしろ荒々しさと「あたたかさ」を合わせもつ自然の生命の化身ともいるべき人物として描かれている。彼

が石切場で正に「動物」のように死んだ後、その葬儀の場面が、失われた自然の生命へのエレジーとしての趣きをもった極めて高い調子の描写になっている事実は、彼の生のあり方に対する語り手=作者の激しい憧憬を示しているといわねばならない（PP.182-84）。<sup>8</sup>

ところで、Annable が教区牧師の職を捨てて森番となったのは、Cyril に語って聞かせた彼の話によれば、Lady Chrystabel という「生まれながらの貴婦人」と結婚したために、「肉体の誇り」(the pride of a body)を傷つけられたからである。最初、Chrystabel は「審美的な光で」彼を「ギリシャの彫像」として眺めていたが、やがて世紀末のラフェエロ前派の描く女性、特に「シャロット姫」(Lady of Shallott)と自分を同一視するようになって、彼女自身「靈的な」(souly)存在となり、その結果、彼を単なる「牡の動物 — 牡牛」(son animal — son boeuf)としか見做さなくなったという(P.177)。作者がこの「Annableの話」を導入しているのは、彼とChrystabel の関係によって George と Lettie の関係を照らし出そうという意図があるからだと思われる。そのことは、二人の男が共に美しい男性的な肉体の持主であること、彼らがそれぞれ相手の女性に「牡牛」と見做されていること、また Lettie も Chrystabel と同じように「審美的に」George の姿をみていること、によって明らかである — George の「肉体の美しさ」に魅せられる場面で、Lettie は「あなたは絵のようだわ。田園風景の絵にピッタリだわ」(You are picturesque. Quite fit for an Idyll. P. 63)<sup>9</sup> といっている。さらに、Lettie と Chrystabel を結びつけるとりわけ重要なものとして「孔雀」のイメージがある。

春のある日、Cyril が廃屋になったある教会の庭を訪れるとき、そこへ一羽の孔雀がやってきて、古い天使像の上にとまる。その後を追うように Annable が現われて、孔雀をののしり始める。

‘The proud fool! — look at it! Perched on an angel, too, as if it were a pedestal for vanity. That’s the soul of a woman — or it’s the devil.’

.....

‘That’s the very soul of a lady,’ he said, ‘the very, very soul. Damn the thing, to perch on that old angel. I should like to wring its neck (pp. 174-75).’

孔雀は糞をした後、Annableの投げつけた芝土に「金切声」を上げて飛び去って行く。それに追いうちをかけて彼は叫ぶ。

‘Just Look!’ he said, ‘ the miserable brute has dirtied that angel. A woman to the end, I tell you, all vanity and screech and defilement (p. 175).’

Annable がこの孔雀に Chrystabel を見ていることはいうまでもないが、さらに彼は女性を一般化して、「虚栄と金切声と冒瀆」が女性という存在だといっていることに注意する必要がある。また、Lettie が「白孔雀」のイメージで捉えられているのは、結婚後間もなく、夫の Leslie を従えるようにして George の前に姿を現わす時である。彼女の靴ひもを直そうとする夫をひざまづかせたまま、彼女は横目で George に微笑みかける。自分を恋した二人の男性に対して「勝ち誇った」態度をひけらかす、次のような描写で描かれた彼女の姿は、正に、Annable の呪誦する「虚栄の台座のように天使像の上にとまった」孔雀の姿を想起させる。

When we reached the house Lettie dropped her draperies and rustled into the drawing-room. . . . As she turned laughing to the two men, she let her cloak slide over her white shoulder and fall with silk splendour of a peacock’s gorgeous blue over the arm of the large settee. Then she stood, with her white hand upon the peacock of her cloak, where it tumbled against her dull orange dress. She knew her own splendour, and she drew up her throat laughing and brilliant with triumph (p. 292).

ロレンスは、この George — Lettie および Annable — Chrystabel という二組の男女関係を対応させることによって、何を示唆しているのだろうか。ま

す、男性の肉体を「意識」を通して審美的に眺めるこの二人の女性の生のあり方が「肉体」に対する「冒瀆」であることを、作者ははっきり示している。Lettie は Leslie との結婚によって Lady Chrystabel すなわち「孔雀」のような「貴婦人」となった。しかし彼女の生活は彼女自身の肉体的自我を意識的に無視することで初めて成立するものなのである。この彼女の生き方と真向から対立する、あくまでも「肉体の誇り」を失わず、「よき動物」たろうとする生き方を体現しているのが Annable である。そして George は、この森番と同じ美しい男性的な肉体をもちながら、自己の「肉体の誇り」を主張しなかったために、いたずらにその活力を浪費して零落していった。では, Annable の生き方は、あるべき男性の生のあり方を George に対して指し示しているのであろうか。Annable の死に際して、作者がほとんど感傷に陥しかねない<sup>10</sup> 自然讃歌の描写を捧げている事実は、彼のような生命存在に対する作者一語り手の激しい憧憬を表わしている。しかし同時に、作者は Annable のために「動物」のように生きることを強制された彼の二人目の妻と子供たちの悲惨な生活を、極めて写実的な筆致で描写することによって、また、「〔Annable の死〕は復讐であったというそれとない風説が村に流れた」(P.182) という一文を配することによって、彼の生き方が文明社会と相容れない、いいかえれば、彼は社会のアウトサイダーとして以外もはや存在し得なかったことを示唆しているのである。このアムビヴァレンスは Cyril の George に対する曖昧な態度に通じている。すなわち, George が「意識」に目覚めることには必然性があるにもかかわらず, Cyril はそれを積極的に肯定できず、自然の生命への激しい憧憬のあまり、彼は、すでに述べた小説の最後の場面で、George の破滅に対する責任が彼の「意識」を目覚めさせた自分にあるかのように、自己嫌悪に陥っているのである。この小説が、男性の肉体の体現する「自然」な生のあり方と女性の支配する「社会」との対立を描いているとすれば、Cyril は後者の立場に立ちながら、同時にその立場を嫌悪している人物なのである。このことは、おそらく、彼がほとんどただ情景を語るだけの傍観者として終始することと無関係ではないと思われる。

## Notes

1. *The Collected Letters of D.H. Lawrence*, ed. Harry T. Moore, 1965, P.5。
2. *Yudhishtar, Conflict in the Novels of D. H. Lawrence*, 1969, P.59 参照。
3. *The White Peacock*, Penguin Books, 1966, P.17。以下、本文中に記したページ数はこの版による。
4. この点に関しては、Alastair Niven, *D.H. Lawrence*, 1978, P.21。および R. E. Pritchard, *D. H. Lawrence: Body of Darkness*, 1971, P.27 参照。
5. H. M. Daleski は、George はロレンス自身の父親が無意識に投影されている人物であり、従って、この引用部分は、作者の父親的な人物に対する「激しい無意識の憧憬と愛情」を示唆していると述べ、説得力のある論証を行っている。また彼は Annable も作者にとって同じ意味をもつ人物だとしている。なお、彼のエッセイが拙論のヒントを与えてくれたことを断わっておきたい。Daleski, *The Forked Flame: A Study of D. H. Lawrence*, 1965, PP.312-315 参照。
6. Jeffrey Meyers, *Painting and the Novel*, 1975, P.51。
7. 森番 Annable はロレンスの後期の作品に頻出する、いわゆる 'dark heroes' の先駆であり、とりわけ *The Lady Chatterley's Lover* に登場する森番 Mellors と類似する点が多い。
8. A. Niven はこの Annable の葬儀の場面を、自然描写に満ちあふれたこの小説の中でも最も優れたものと見做し、細かな分析を行っている。Niven, PP. 11-14。
9. J. Meyers はロレンスに最も大きな影響を与えた世紀末の画家の絵が Maurice Greiffenhagen の *An Idyll* (1891) であると指摘し、この絵と *The White Peacock* との関連について論じている。Meyers, PP. 46-52。

10. F. B. Pinion, *A D. H. Lawrence Companion : Life, Thought, and Works*, 1978, P. 129 参照。

